

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その 40 (ニューズレター No.115 2026.3.2.発行) 「低平地と木杭基礎」 福岡 仁 ((公財)日本技術士会九州本部佐賀県支部長)</p> <p>図 30 年超経過した木杭基礎断面</p> 	<p>佐賀平野では、厚さ 10m以上の非常に圧縮性の高い粘性土地盤が堆積しており、吉野ヶ里の時代から近代まで構造物の基礎に木杭を利用してきた歴史があります。そして、佐賀城の基礎や三重津海軍所ドッグ跡の木製護岸などの遺構から木杭が多く利用されていたとの報告があります。しかし、戦後の高度成長期になると、急速に大量のインフラ整備が全国で展開され、構造物の基礎には、形状や強度が均一なコンクリート杭や鋼管杭が主流となりました。その結果、木杭は旧来工法として、構造物の大小に関係なく陰を潜めて「木杭は腐朽しやすく耐久性に劣るのでは？」という声から、次第に敬遠されてきました。</p> <p>2004年に発足した木材利用研究会（佐賀）では、2010年から、クリークの木柵を対象に、3年、5年、10年の経過年数ごとに、木杭の腐朽度などの調査を行いました。その結果、耐久性にほとんど変化がないことが分かりました。2026年1月、県道神埼北茂安三田川線の改良工事にて、30年以上経過した長さ6mの木杭基礎が出現しました。当研究会にて、引き抜かれた木杭をチェーンソーにて切断したところ、鮮やかな年輪の断面が確認されました。水中や地下水以下では、腐朽菌の発生が小さいことから、耐久性はそのままだということが分かりました。多様性の時代、スギやヒノキなどの間伐材を、形状や種類が不均一であっても、カーボンストックの観点から構造物の木杭基礎として有効利用したいものです。</p>